

## 勢山文書 ④ 「おさしづ」の写し翻刻

おやさと研究所員  
安井 幹夫 Mikio Yasui

(4) - (カ) 明治廿一年六月廿日 午前二時

さあへなにおしらそふへ 一日もはやくへへ 何を  
しらそふ あちらもこちら身ものさわり なやむ処みのさわり  
をみわけ どふゆう事もなんでもかでも せんへの処でにや  
ならん 入こむ所へ尋ねやにやならん さあへ一時ならん処  
からたちなしたる処 一寸世上の理におされ 世上の処ハ一  
寸の道つけたる処 まつへ今迄の道もふじうやあるふがへ  
まつている者もある はやくへ十分はこぶ所 なす事理二は  
づれてあるへ 一寸ほそきへの道がゆるしてある処 ころ  
りとなつから 処がまちごふて有 一時はやくへへへ  
おさめてしまへ ほそへの道でも」(4ウ)

やつて見よふか はやくへせねバ どこにやいバあるやしれ  
ん 一寸ほそへの道でも つけたる処ハ こんどなかへつ  
おい なかへつよいでへ

(注) これもおさしづ正冊にないものである。

(キ) 明治廿一年七月二日 午前四時五十分

さあへ にわかになへへ 一寸しらしおこふ 身の処二心得  
んから にわかにしらしおこふ あちらにもこちらにも ぎつ  
とちよとわかりた 第一世界の道 さわりからどふゆう里もわ  
かる処 一寸でわならん 世界の処でハマあ足がいたいとい  
うた処で にわかにはらがくたるとゆへバ 第一にわかにはやく  
へ 一時いそく事 第一せいてハならん せんへより世  
上」(5オ)

にハいろへにさとる 第一の処さとすれば 一寸の理がはやく  
へ さとらにやならん とふくの理ハ一寸世界の理 神の  
理ハさあへ一時ならん 一時の間もいそぐへ 処ハいそが  
んで いそかいでもよい事をいそいでとふもならんへ

(注) 正冊「明治二十一年七月二日(陰曆五月二十三日) 午前  
六時 本席腹下るに付伺」と比較するとき、脱落語句多し。

(ク) 明治廿一年七月三日 午後四時五十分

さあへ 身上に一寸の事情 いかなる事尋ねるへ さあへ  
きくやへ はやくへ さあへはなし一ツ はやくへ  
のべにやならん さあへはやくへまぢかねたへへ さ  
ああちらへもへ こちらへもへといふてとんとそろわん  
今第一そあるふた一時なにの事 いそいでへなにか」(5ウ)

世界の事情はこバにやならん さあへいふハ糸らい事をいふ  
で 一ツさあへじバの一ツの理 はやくへ さあへ一寸  
理を初メよ なんにもしやんハいらん まづへぜんへに聞  
たかんろふだいの一条 どふでもこふでもせねバならん とふ  
でもへいふわ聞てくれねバならんへ 世界の事情ハ十分で  
あるふ まつへ今迄の道どうでもへ さあへ一寸はじめ  
だし 心でこわいとおもへバこわい なんにもあふなきハもふ  
ない もふ十分の刻限きたおもへバ すみやかな道とふれるで  
サあさあ元々きけバ女一人が初まり 中々の道である みの処  
ハかんろふだい一ツでかくら勤メやはしめ 今迄の道 一寸臺  
でけた」(6オ)

日もあるふ さあなんぼ本部ができたとて なんにもわからん

さあへ心定メよ なにかの処 一寸の処で一寸たさにやなら  
ん さあへ一寸むつかしいであるふ とんな道もある 本心  
にまことの道があればはやくへかゝれよ

(注)「明治二十一年七月三日(陰曆五月二十四日) 本席の御障りに  
付おさしづ」の写しと思われるが、ニュアンスは同じでも言葉  
が違うところが目立つ。後半部分は正冊とはまったく異なる。(ケ) 明治廿一年七月十一日 東京二於テ本部を許サレタルニ  
付御地場へ八分教会ヲ御免被下ルヤ又本部を御許シ被下ルヤ御伺  
さあへこれへよふ聞わけ 小さなものハめいへ 壹人して  
てけるもので有 おふきな事というものハ ちよいと理を聞て  
も 此里ハ大きなものであるといふさし」(6ウ) つしておく(注)「明治二十一年七月三日 本席の御障りに付おさしづ」の  
内、後半の「押して、これまで本部、東京市下谷区北稲荷  
町四十二番地に設置有之處、おぢばへ引移りの事を御許し  
下さるや願」である。日付が違っている。(コ) 全年全月全日 教会本部東京二有ルヲ御地場へ引二付押  
テ御願

さあへたんへの里をきくなへ 一寸の里をさとす 世上  
のきやすめ里を処をかへて一寸咄し 納メた世上ニ一寸理を  
納メる じバの理と世界の理とハ大きなちがい 世界で処をか  
へて本部へといふて いまゝでとゆうていれども 世界中み  
な本部にした処がなんにもわかるまい 地場に一寸の理があれば  
こそ 世界の理も納るへへへ」(7オ)

(注)「明治二十一年七月二日(陰曆五月二十三日) 午前六時本  
席腹下るに付伺い」の中、「右に付き、教会本部をぢばへ  
引移りの事を押して願」の一節である。また脱落箇所、言  
葉の違う箇所もあり。

(サ) 明治廿一年七月十一日 午後九時刻限

さあへ 尋る処 どれからゆくのも同じ事 皆のものそとから  
理二おされへ 神一条の道聞訳てくれ なんでもない処から  
たんへ道をつけてきて有処 せんへよりみなつたへてある  
そこで大かん道ハ通りにくい ほそ道ハ通りよい みなこのた  
ひの処 本部のほふい掛やいへ どふでもかふでも神一条見  
せにやならんへ 此度道おされるから一寸ほそ道をゆるした  
もの どふでもこふでも一寸の道 通らんならん そこではやく  
へ道をこんでしまへ」(7ウ)

(注) 正冊では「明治二十一年七月十一日(陰曆六月三日) 本部  
をおぢばへ移転するに付、奈良縣廳へ届書にして宜しきや、  
又、願にして宜しきや伺」

(シ) 明治廿年八月四日 午後八時刻限

さあへ一寸の事たけゆうておこふ なるよふの事も道をあける  
道おあけたら人心ハむこふからもちてくる 此屋敷人間心たす  
でない そんな事なに二なるぞや 神のいう事はづしてなんにも  
らん

(注) 正文に記載なし。